広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	アトリエ『プチ・ニコラ』
Author(s)	安藤，麻貴；野呂，康；平松，英夫
Citation	フランス文学 ， 33 ： 95 - 122
Issue Date	2021-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051038
Right	
Relation	

アトリエ『プチ・ニコラ』

安藤麻貴／野呂康／平松英夫

本論の成立経緯

本稿は 2019 年度及び 2020 年度日本フランス語フランス文学会中国・四国支部大会での 2 回の「アトリエ『プチ・ニコラ』」の記録である。アトリエとしたのは、研究発表ではなく発表を題材に会場の参加者と自由な討論を行いたいと考えたからである。2019 年度の大会では平松と野呂が、2020 年度には安藤と野呂が題材を提供した。

本論では発表原稿を配置し直し、以下の順で論ずる。**I 紹介編**では作家と作品の紹介をする。**II 読者編**は想定される読者層についてのアンケート調査の結果と分析を示す。**III 教材編**ではフランス語教育の現場での利用法について具体例を示しながら考察した。最後に **IV 資料編**として書誌を提示する。本論では既刊本の整理に主眼をおき、二次文献については割愛した。

I 紹介編

I-1 版本紹介

『プチ・ニコラ』はルネ・ゴシニが文章を、ジャン–ジャック・サンペがイラストを担当した共同制作の産物である。当初 1955 年に、ベルギーの『ル・ムスチーク』にマンガ形式で掲載された。当時の題名は *Les Aventures de* [ou *du*] *Petit Nicolas* であった。「サンペとアゴスチニによる」とされており、サンペがイラストを描きテクストはゴシニ（アゴスチニ）が執筆している。アゴスチニは明らかに Goscinny の名前のもじりである。このマンガを媒体とした共同制作はおよそ半年ほどで終了した[1]。その後 1959 年に発表媒体を『シュッド–ウェスト・ディマンシュ』に移し文章版の読み物として発表された。その後再度媒体をゴシニが創刊した『ピロット』に移し 1965 年まで連載が継続された。

連載と並行して 1960 年から単行本が刊行されている。1964 年までに 5 冊が刊行され、86 話が収録された[2]。長らく『プチ・ニコラ』といえば、本国でも我が国で

---

[1] SEMPÉ et GOSCINNY, *Le Petit Nicolas la bande dessinée originale*, Paris, IMAV éditions, 2017, p.5.（*PN* ⑨）以下注では『プチ・ニコラ』の刊本はすべて *PN* と省略記号で示し、「IV 資料編」の書誌に付した書籍の番号（①〜⑨）と引用頁を記す。

[2] *Le petit Nicolas*（*PN* ①〜⑤）.

もこの5分冊を指していたが、2004年以降にそれまでの単行本には未収録であった作品が刊行され始める。

但し 5 分冊の刊行後、作者であるゴシニとサンペはシリーズをやめてしまう。1977年にはゴシニが死去し、共同作業に終止符が打たれた。

2004 年には、雑誌に掲載されていながら単行本には収録されていなかった話がまとめられ、『プチ・ニコラ未刊行作品集』第1巻[3]が出版された。これには既刊収録数とほぼ同数の話が全10章に振り分けられている。

続いて 2006 年には 45 の話が『プチ・ニコラ未刊行作品集』第 2 巻[4]にまとめられ、2009 年にはさらに未収録の 10 話をまとめた『風船、その他未刊行作品集』が刊行されている[5]。話そのものは雑誌掲載時のままであるが、サンペが 2008 年にアクリルで彩色した70枚のイラストを含む、ハードカバーの豪華愛蔵版である。

以上の8冊をもって、雑誌に掲載されたほぼ全ての話がようやく日の目を見たことになる[6]。

I-2 作者紹介[7]

マンガ版でふきだしを、文章版で文を担当したのがルネ・ゴシニである。1926年 8 月 14 日にパリで生まれたゴシニは、幼少期をブエノスアイレス（アルゼンチン）のフランス語学校で過ごす。19 歳の時にウォルト・ディズニーのスタジオを見学したらしい。1955 年、ニューヨークでマンガ家のモリス・ドゥ・ベヴェール（1923-2001)と共同で『リュッキー・リュック』シリーズの連載を開始する。1959年には、アルベール・ユデルゾと記念碑的大作『アステリクス』の連載を始めた。2013 年にフランス国立図書館で開催された展覧会のカタログ『アステリクス A からZまで』によると、シリーズは世界中で3億5千万部以上売れ、ラテン語やエスペラントを含む 111 の言語と方言に翻訳されている。ゴシニはその他にも多数のマンガの台本を執筆している。ちなみに『アステリクス』シリーズはゴシニの死後もユデルゾが単独で継続していたが、そのユデルゾも 2009 年に鬼籍に入り、2013 年からは新たに別の作家が継続している。

ゴシニは 1974 年にスタジオ・イデフィクスを設立し、アニメや映画、出版事業

---

[3] *Histoires inédites*..., 2004.（*PN*⑥）
[4] *Histoires inédites*..., 2006.（*PN*⑦）
[5] *Le Petit Nicolas*..., 2009.（*PN*⑧）
[6] この 8 冊に収録されなかった幾つかのテクストについては近年、判型を変えて刊行されたシリーズに「おまけ」として付されている。「IV 資料編」を参照のこと。
[7] ゴシニとサンペについては、日本語版『プチ・ニコラ』の全ての巻に同一の略歴が付されている他、最新版の購入特典である『Le Petit Nicolas プチ・ニコラ 0』（以下では『0 巻』と記す）でも、小野萬吉氏が追加情報を提供している。

に乗り出す。この頃のゴシニの生産力は一驚に値する。アニメ映画を制作し、映画の台本を執筆し、テレビ番組を制作し司会も務めている。それらの傍、書籍や BD の仕事を継続している。しかし制作者としての絶頂期であった 1977 年 11 月 5 日に亡くなった。享年 51 歳、あまりにも早い死であろう。

イラストはジャン–ジャック・サンペが担当した。サンペは 1932 年 8 月 17 日にボルドーで生まれた。18 歳でパリに上京してからはイラストを売り込むために、幾つもの編集部を渡り歩いたそうである。1950 年には匿名で、翌年には本名で『シュッド–ウェスト』に最初のイラストが掲載されている。1956 年以降は『パリ・マッチ』や『ニューヨーカー』など、複数の雑誌にイラストを提供している。1962 年に最初の画集『単純なものなど何もない』を出版してからは、現在に至るまでほぼ毎年のように画集を上梓し、その数はすでに 40 冊を超えている。

I-3 作品の設定

文章版の紹介に入ろう。『プチ・ニコラ』の話はすべて、「ぼく」＝ニコラという一人称の視点から語られている。つまり原則としてニコラの日常、ニコラの知り得る世界、周辺の出来事で話が構成される。よく読めばどう考えてもニコラが知り得ない情報や情景に気づくが、二人の卓越した制作力のおかげで目立つことはない。

ニコラに関する情報は限られている。名字も年齢も学年も住んでいる場所も明確に記されていない。ニコラはどうやら小学校の低学年で、家族三人で一軒家に暮らしている。読者にわかるのはその程度である。

すべての登場人物は類型化されている。ニコラの親友アルセストは「でぶの太っちょ」で「いつも何か食べて」いる。アニャンは「クラスで一番で先生のお気に入り」など。登場人物の属性は繰り返し語られるため、読者はある程度まで次を推測できる。一例のみ挙げると、一家の隣人であるブレデュールが登場すればパパと争いとなる。こうした繰り返しは心地よい。

作品の特徴 1　論理の飛躍

『プチ・ニコラ』は特徴ある語りで構成されている。小学生であるニコラの説明は省略が多い。例えば、クラスメートのクロテールに関して，ニコラは次のように紹介する。「クロテールはクラスで一番びり。先生にあてられると、いつも休み時間が抜きになる[8]。」クロテールは「クラスでビリ」→勉強に身が入らず、先生の話

---

[8] « C'est le dernier de la classe. Quand la maîtresse l'interroge, il est toujours privé de récré. »(*PN*⑦, p.12).*PN*⑦の pp.12-13 は登場人物の姿がその特徴とともにほぼ網羅されており便利である。とりわけ、すべて本文からの抜粋であるため、ニコラが観察し描いたユニークな人物紹介となっている。以下「作品の特徴」

を聞いていないから答えられない→罰として「休み時間が抜き」になるという論理だが、語りに表れるのは「先生にあてられる」→「休み時間抜き」だけであるため、読者がこの間の論理を補わなければならない。注意深く読みつつ、かつ物語の設定の前提を踏まえていないと、ニコラの理屈が理解し難い場合もある。

作品の特徴 2　KY な（空気を読まない）ニコラの観察が笑いをそそる

「ぼくの復活祭のヴァカンス」という話を取り上げよう。以下はニコラ一家がヴァカンスに出発する場面である。出発の直前、一家はなぜか隣人のブレデュール宅に立ち寄る。

> ぼくらは朝すごく早くに出発した。それで出発前にパパは、お隣りのブレデュールさんのところの呼び鈴を鳴らして、これから出るよ、海辺まで足をのばしてくるかもな、と知らせにいったんだ。ブレデュールさんはしましまのパジャマを着ていて、なぜだか分からないけど、あんまり嬉しそうじゃなかった。それでもブレデュールさんはやっぱり親切だった。ぼくたちにお気をつけてなんて言ってくれたんだもの。「お・き・を・つ・け・て！」とね[9]。

ニコラは目の前で起きたことを淡々と列挙する。つまり単なる観察の記録にすぎない。だが読者がブレデュールさんとは、「家のお隣さんで、パパをからかうのが大好き」な人であり、何かにつけてパパと張り合っている[10]のを知っていれば，この箇所にユーモアを感じるであろう。

「朝すごく早く」に出発するのだから、パジャマを着ていたブレデュールは寝ていたに違いない。パパは留守をお願いしますと依頼しに来たのでもなく、ヴァカンスに出ることだけを伝えている。ブレデュールにしてみれば、隣人がヴァカンスをどこでどう過ごすかなんて一ミリも自分に関係しない。朝早くに叩き起こされたのだから、「あんまり嬉しそうじゃなかった」のも当然である。不機嫌なブレデュールは、ああそうですかと言わんばかりに捨て台詞を吐く。これを聞いたニコラは皮肉の混じる言葉のトーンには気づかず、字句通り受け取り、「やっぱり親切だった」と結論する。

それでは、引用末尾の原文をそのまま訳すとどうなるか。

> ぼくたちにお気をつけてなんて言ってくれたんだもの。「お気をつけて」と彼は言った。

では既訳を参照しつつ、本論の論旨に合うよう原文から訳している。

[9] *PN* ⑦, pp.351-352.

[10] パパとブレデュールの関係性については「III 教材編」で詳述される。

かなり淡白な記述である。「お気をつけて」という表現が、最初は第三者に伝える間接話法で、二度目は言われた言葉をそのまま繰り返す直接話法で提示されている。伝える内容は同じだが、後者の方が臨場感を伴うはずである。それゆえ、ブレデュールの言葉の調子を想像して訳文に反映しないかぎり、無味乾燥な「お気をつけて」の繰り返しとならざるをえない。ニコラはといえばKYすぎて皮肉やトーンの違い、発話状況による意味の変化が理解できない。それにしても、細大漏らさぬ観察と正確な記述とは残酷なものである。

作品の特徴3　観察と飛躍の混合

それではパパの兄弟で、パパと大の仲良しのウジェーヌおじさんを例に、上記の2つの特徴の混合例を見てみよう。当初の5分冊の読者はウジェーヌおじさんの「鼻」の形くらいしか知らなかったが[11]、『未刊行作品集』（*PN*⑥）の刊行により、実際にはお話に登場していたことが判明した。

さて「ウジェーヌおじさん」というお話で、おじさんは一家と夕食を共にする。椅子に画びょうをおいたり、グラスに穴を開けておいたり、食事中パパとおじさんは子どもじみた「悪ふざけ」を繰り返す。ところが夕食後、おじさんを見送ったパパは突如として真顔になりニコラを叱りつける。

> パパがぼくに言うには、ウジェーヌおじさんの目の前では言いたくなかったが、デザートのお菓子を二度もお代わりするなんてとんでもない、ちゃんとお願いしますって言ってからとらなきゃいけない、ぼくはもう大きいんだから、いつまでも行儀の悪い子どものようにしてちゃダメだ、だって[12]。

既訳でオチの部分は「…しつけのわるいわんぱくみたいなことをしてはいけない、と、なんとパパが、ぼくにお説教したんだよ」とされている[13]。つまり下線部は翻訳者が付加したもので原文にはない。話には、お酢を吐き出したり、スープに塩を入れたり、焼き肉に胡椒を振りかけて食べられなくしたりと、パパとおじさんによる度を越えた悪ふざけが列挙されている。二人のほうこそ「お行儀が悪い」はずなのに、そんな自分たちのことは棚に上げて、パパはニコラの犯したささいな行儀の

---

[11] « Le nez d'Eugène »(*PN*②, p.12),　「ウジェーヌおじさんの鼻」（邦訳）。

[12] « Il [papa] m'a dit qu'il n'avait rien voulu dire devant tonton Eugène, mais que je n'aurais jamais dû reprendre deux fois du gâteau sans demander la permission, et que j'étais déjà assez grand pour ne plus me conduire comme un gamin mal élevé. »(« Tonton Eugène »(*PN*⑥, p.203).

[13] 「ウジェーヌおじさん」（偕成社版『かえってきたプチ・ニコラ2』、2006年、p.105）

悪さを咎めた。それゆえ最後のパパの小言によって、自らを顧みない身勝手な大人の姿が浮き出てくる仕掛けである。論理から言えば、「なんと〔度を超した悪ふざけを一晩中していた、あの〕パパが、〔お菓子を二度お代わりしただけの〕ぼくに説教したんだよ」と補えるところであるが、翻訳者はこの落差を伝えようと最小限の追加を施したわけである。ニコラの淡々とした記述では論理が飛躍し、読者は想像を逞しくする必要がある。それが原文を読む楽しみではあるが、そんな落差をやはり淡々と日本語に移し替えるだけでは、多くのことがすり抜けてしまうのである。

図 1（出典：*PN*⑦, p.127.）

作品の特徴 4　イラストの論理

これまでは語り手ニコラの論理から本作を捉えてきたが、『プチ・ニコラ』はあくまで二人の作者の共同制作であるわけで、当然イラストにも読ませる力が潜んでいる。

まずはメメが泊まりに来たときの様子を表したイラストを見てほしい（図 1）。

ここで「メメ＝おばあちゃん」はニコラの母方の祖母を指す。メメが玄関口に姿を現す。ママンとニコラは歓迎して走り寄る。メメも微笑んでいる。ところがドアの向こう側ではパパが新聞紙を手に正反対の方向に走り出している。玄関の隣の部屋でくつろいでいたのだろう。肘掛け椅子の位置は不自然であるが、この空の椅子を目にした瞬間、読者はパパの安息が妨げられたこと、義母の訪問を喜ばず逃げ出したことが理解できる。文章の該当箇所は、次のようにそっけない。

> メメが夜に到着した。メメが呼び鈴を鳴らしたので、ぼくとママンは玄関の扉に駆け寄り、メメがトランクを持って入ってきた[14]。

歓迎の場面から少し離れ、段落の終わりにようやくパパが登場する。

> パパは新聞を手に近づいて、メメは頬を突き出し、パパはすっごく素っ気なくチュ。ビズした。「ごきげんよう、婿殿」とメメ。「ごきげんよう、御義母様」とパパ[15]。

---

[14] *PN*⑦, p.127.

[15] « Papa s'est approché son journal à la main et mémé lui a tendu une joue que papa a embrassée très vite, plic. « Bonjour, gendre », a dit mémé. « Bonjour, belle-mère », a dit papa. »(*ibid.*)

文章からはどうにもぎこちない様子が伝わってくる。二人のぎこちない仕草から、一読パパがメメを歓迎していないことに思いあたる。過去の出来事を淡々と描写する複合過去形が幾つも連ねられ、まさに「素っ気ない」リズムを作り出している。さらに「チュ」というオノマトペの挿入がおざなり感を醸し出す。こうしてフランス語の時制やリズムまで加味すれば、文全体もやはり二人の微妙な距離感を表すのに絶妙な効果をもたらしていると言える。しかしイラストは、そんな関係性を一目で理解させてくれる。イラストがテクストの説明をするのでも、テクストがイラストを謄写するのでもない。イラストが独自に何かを伝える機能を担うようである。

II 読者編

II-1　アンケート調査

『プチ・ニコラ』がフランス人の間でどのように受け入れられているのか明らかにしたいと考え、20〜40 代のフランス人、男女 20 名（男性 9 名、女性 11 名）を対象に 7 題からなるアンケート調査を行うことにした。この作品を日本での語学教育で使用できないかという考えも浮かび、この点も踏まえた調査となった。

『プチ・ニコラ』アンケート調査

（対象: 20〜40 代のフランス人男女 20 名）

平松が 2019 年 11〜12 月に実施した。

第 1 問: 「『プチ・ニコラ』を知っていますか。」« Connaissez-vous *Le Petit Nicolas* ? »

「知っている」: **20 名**

第 2 問: 「読んだことがありますか。」« L'avez-vous déjà lu ? »

「はい」: **16 名**（「何度も繰り返して読んだ」: **2 名**）／　「いいえ」: **4 名**

第 3 問: 「読んだのは何歳の時ですか。」« Si « Oui », à quel âge l'avez-vous lu ? »（読んだことがある **16 名**を対象にした。）

10 歳: **8 名**／　8〜12 歳: **2 名**／　7〜11 歳、8〜10 歳、8〜15 歳、12 歳未満、11〜12 歳、13 歳: **各 1 名**

第 4 問: 「どのようにしてこの物語を知りましたか。」« Comment l'avez-vous connu ? »（**全員**を対象にした[16]。）

[16]「先生と両親の双方から教えられた」という回答が 1 件あり、「小学校で、または小学校の先生を通して知った」と「両親、または家族から教えられた」の双方でカウントしたため、総計が 21 名になる。

「小学校で、または小学校の先生を通して知った」: **9 名**／「両親、または家族から教えられた」: **7 名**／「両親か小学校のどちらかを通して知った」: **1 名**／「図書館で知った」: **2 名**／「噂で知った」、「分からない（文化の一部になっている）」: **各 1 名**

第 5 問:「物語のどのようなところに関心を持ちましたか。」« Qu'avez-vous trouvé d'intéressant dans l'histoire ? »（読んだことがある **16 名**を対象にした。）

「ユーモア・滑稽なところ」: **6 名**（書き足し: 「子供のいたずら」、「サンペのユーモア、子供っぽく話すところ」、「子供の視点とロジック」、「状況」）／「主要登場人物の好奇心といたずらをするところ」、「子供たちの問題」、「感情移入できる物語である点」、「冒険する主要登場人物が、現実の子供たちに似ているところ」、「ポエジー、主要登場人物と外界のつながり」、「教育的なところ」、「仲間の一団」、「仲間意識」、「何も思い出さない」、無回答: **各 1 名**

第 6 問:「小学校で、先生はこのテクストを使用しましたか。」« A l'école primaire les instituteurs avaient-ils utilisé ce texte ? »（読んだことがある **16 名**を対象にした。）

「はい」（「おそらくそう思う」と答えた **1 名**を含む。）: **10 名**／「いいえ」（「そうは思わない」と答えた **1 名**を含む。）: **3 名**／「どちらか分からない」: **2 名**／無回答: **1 名**

第 7 問:「日本の大学で初級フランス語を学ぶためにこの物語を使用することについてどのように思いますか。」« Qu'en pensez-vous si l'on utilise cette histoire à l'université japonaise pour apprendre le français élémentaire ? »（読んだことがある **16 名**を対象にした。）

「大変良いアイデアだ」: **10 名**／「素晴らしい発意だ」: **2 名**／「大変興味深い」、「とても良い計画だ」、「それはとてもうまくいくだろう」、「もちろん」: **各 1 名ずつ**

勧められる理由:

「理解しやすいシンプルな文体で、上手く書けているから」、「本文がシンプルでよく書けているから」、「学生にとって面白いから」、「使われている単語がシンプルだから」、「単語がシンプルで、豊富だから」、「フランスとフランス文化をとてもよく表しているから」、「フランスの社会を知り、理解するうえで助けになるから」、「私たちの文化交流に役立つから」: **各 1 名**

語学学習のためのテクストとしての使用することに肯定的な考えを持つ人のなかには、社会・文化面での発信媒体としての使用に否定的な意見を記した人もいた:「描かれているフランス社会は、今日の社会を正確に表しているとはいえない。」、「フランスはある面において、描かれている時代から大きく変わってしまった。」: **各 1 名**

II-2　結果分析

第1の「『プチ・ニコラ』を知っていますか。」という問いに関しては、知らないと答えた人はおらず、このことから、当作品が国民的な読みものになっていることがわかる。

第2の「読んだことがありますか」という問いに関しては、実際に読んだことがあるのは16名（男性7名、女性9名）で、全体の8割に相当した。その内2名（女性）は「何度も繰り返して読んだ」と書き加えており、物語に対する愛着ぶりがうかがえる。

第 3 の「何歳の時に読みましたか。」という問いに関しては、半数（男女、各 4 名）が「10 歳」の時と明記した[17]。主要登場人物が子供たちなので、小学生の時（6〜10歳）に読まれるのが妥当だといえるが（読んだことがある人の8割以上）、なかには中学生（11〜14 歳）になってから読み始めている人も 2 名（男女、各 1 名）いた。また、中学生に相当する年齢に達するまで読んでいた人が 7 名（男性 4 名、女性 3 名）いることも確認できる。これらのことからは当作品が、小学生でもう卒業、とはいかない魅力をもっていることがうかがえる。1 名だけ高校 1 年生に相当する 15 歳まで読んでいた人（40 代男性）がいるが[18]、彼は修士課程まで文学を学んだそうで、元来本好きだと述べた。中学、高校と読み続けられていることからは、アカデミックな書物に関心を持ちはじめる年頃に達した人にとっても、『プチ・ニコラ』は読むに耐える魅力を秘めていることがうかがえる。

第 4 の「どのようにしてこの物語を知りましたか。」という問い（全員対象）に関しては、小学校か家庭のどちらかで知ったと答えた人が大多数を占めた[19]。
その内訳を述べると、「小学校」、または「小学校の先生」を通して知ったという人が 9 名（男性 2 名、女性 7 名）、「両親」から教えられた、または「家族」を通して知ったという人が 7 名（男性 4 名、女性 3 名）であった。また「両親か小学校のどちらか」を通して知ったという人も 1 名（女性）いた。これらの回答からは、『プチ・ニコラ』が教育の場にだけでなく、家庭にも浸透していることがわかる[20]。彼らのなかには「両親から贈られた」（20 代女性）、または、「両親の書斎で」（40 代男性）見つけたと書き加えた人もあり、このことからは、アンケート協力者たちの

---

[17] おそらく 10 歳頃と解釈してよいものと考えられる。
[18] フランスの学制は日本のものとは異なる。小学校は 6〜10 歳の 5 年間。中学校は 11〜14 歳の 4 年間。高校は 15〜17 歳の 3 年間である。しかし留年する人が多く、同学年に年齢が異なる生徒がいることもごく普通にある。ここに挙げる年齢区分はあくまで目安的なものとしてとらえられたい。
[19]「先生と両親の双方から教えられた」という回答が 1 件あり、「小学校で、または小学校の先生を通して知った」と「両親、または家族から教えられた」の双方でカウントしたため、総計が 21 名になる。
[20] おそらく国語教育に適した図書としてとらえられているのではないだろうか。

両親もまた『プチ・ニコラ』を読んで育ったのではないかという疑問が生じてくる[21]。他には、人から教えられることなく、自主的に読み始めたという人も 2 名（男女、各 1 名）いた。彼らは一種の文化発信拠点である図書館の子供の図書コーナーに通っているうちに当作品を見つけたという。

ほとんどの回答者が、学校、家庭、図書館で『プチ・ニコラ』と出合っているが、このことからは、当作品がフランス人によって児童文学における古典的作品のようにとらえられていることがうかがえる。

他には、「噂で知った」、「わからない」という回答が 1 名ずつ（共に男性）から出ているが、どのように知ったか明確にできないということは、あえて思い出すことができないほど、当作品が社会に広く深く浸透していることを表していると解釈できるのではないだろうか。そのことは、後者の回答を出した人が付け足した、「文化の一部になっている」という一文のうちによくあらわされているといえる。

文化的に国民の間に浸透している『プチ・ニコラ』だが、その魅力は一体どこにあるのか。この点について、第 5 問から得られた結果をもとに分析した（読んだことがある 16 名を対象にした）。

質問に対して「何も思い出さない」と答えた人、無回答の人が 1 名ずつ（共に女性）いたが、残る 14 名からは明解な回答が得られた。それによると、ユーモラスな作風に魅了された人が圧倒的多数を占めていることがわかる（男女、各 3 名）。「主要登場人物の好奇心といたずらをするところ」と記した人（20 代女性）もいるが、これもまた「ユーモア・滑稽」のカテゴリーに分類できる回答といえるだろう。なかには「子供のいたずら」（女性）、「サンペのユーモア[22]、子供っぽく話すところ」（女性）、「子供の視点とロジック」（男性）、「状況」（男性）などのように、どのような個所にユーモアを感じたのか書き加えていた人もいた。これらの書き加えからは、読者の心を和ませるようなおかしみを醸し出す、登場人物が持つ子供特有のものの見方や考え方、言葉遣いや話し方、行動に読者が惹かれていることがわかる。

他には「感情移入できる物語である点」（40 代男性）に惹かれたという回答が出ている。この回答からは、『プチ・ニコラ』が登場人物の言行をユーモラスに描くことだけで人気を博しているのではないことがうかがえる。登場人物に感情移入するということは物語の中で読者がそれと同化することを意味するが、このことが実

---

[21] ある 40 代の男性は、物語が親から子へと伝えられることをユーモラスに語った:「フランスでは『プチ・ニコラ』は大変有名で、赤ちゃんがお腹にいる母親が音楽のかわりに読んで聞かせるんだ。そうすると、産まれてきた子はこの本が好きになるんだ。」

[22] サンペの挿絵は、読者に語られている状況をより良く彷彿させる役割をもつのではないだろうか。

現するためには、彼等の存在が現実的であることが前提になるのではないだろうか。このような考えに則ると、「冒険する主要登場人物が、現実の子供たちに似ているところ」（男性）に魅せられたという回答は、主要登場人物ニコラの存在が、読者や彼らをとりまく友人たちに十分当てはまるような現実味を帯びているために、感情移入がしやすいということを述べていると解釈できるのではないだろうか。

『プチ・ニコラ』では、物語の背景にも読者をとりまく日常と変わらない現実的な場面が設定されている。また、そこで起きる出来事は主要登場人物の目を通して述べられているため、その視点は物語を読み進めていく読者の視点と必然的に重なり合うことになる。また主要登場人物の視点を中心に物語が展開するため、その主観を通してなされる状況描写に溶け込まされた直接話法による登場人物の発話文が読者に、まるで自分自身が発話し、聞いているかのような印象を与えることになる。これらのことが、読者の主要登場人物への感情移入に一役買っていると考えられる。

他の回答を見ると、ある女性は「主要登場人物と外界とのつながり」（女性）に関心を持ったと記している。「外界」とは子供たちから見た大人の世界を意味すると解釈できる。大人の世界・思考は子供たちのロジック、またそのロジックから生じるユーモアをよりよく引き立てるために措定されていると考えられ、大人と子供の対置関係もまた、作品の魅力を引き立てる重要な要素としてとらえられていることがわかる。

得られた回答からは、内容がユーモラスな面、登場人物や物語背景の現実性、主要登場人物の視点をとおしてなされる叙述、読者を退屈させることなく物語を進展させる淡々とした文体などが相互に作用し合い、読者の登場人物への感情移入を促し、このことが物語を魅力的に感じさせる要因となっていることがうかがえる。

既出の回答とは一見異なる、「教育的なところ」に関心を持ったと答えた人（男性）もいるが、『プチ・ニコラ』は実際に教育の場である小学校で利用されることがあるのだろうか。あるとすれば、どのような用いられ方がなされているのだろうか。

II-3　教育現場での使用

『プチ・ニコラ』は、教育の場である小学校で教科書として実際に使用されることがあるのだろうか。この点について第 6 問で尋ねた（読んだことのある 16 名を対象にした）。結果は次に挙げるとおりである。

「はい」と答えた人（女性 6 名, 男性 3 名）が、「おそらく」と答えた 1 名（女性）を含み 10 名いた。これに対し、「いいえ」と答えた人（男性 2 名）は、「そう

は思わない」と答えた 1 名（20 代女性）を含み 3 名いた。また、どちらかわからないと答えた人が 2 名あり（男女、各 1 名）、無回答の人が 1 名（男性）いた。この結果からは、何らかの形で『プチ・ニコラ』が用いられ、アンケートに回答した半数以上の人が学んでいることがわかる。ある 40 代の男性は、『プチ・ニコラ』をセギュール伯爵夫人の作品『ソフィーの不幸』[23]と同時にとりあげ、「『ソフィーの不幸』はイギリスで子女教育のために用いられているが、フランスでは『プチ・ニコラ』が使われるんだ。」と述べた。

『ソフィーの不幸』は、教育熱心な両親に育てられる主人公のソフィーが、従兄弟のポールと共に様々ないたずらをして大人に叱られるというストーリーの物語である。この物語と『プチ・ニコラ』の類似性について考えてみると、子供のいたずらがユーモラスに描かれている点だけでなく、物語が主要登場人物の視点を通して展開しているところも共通していることがわかる。第 5 問の回答で見たように、読者の主要登場人物へ感情移入できる点が、子供たちに物語を魅力的に感じさせることに寄与しているわけだが、このような書き方は子供たちに、登場人物との同化を経て虚構の世界での出来事を現実のことのように感じさせることを狙ってなされているだけでなく、その先にさらなる別の目的が定められているのではないかという疑問を生じさせる。というのも、そもそもセギュール伯爵夫人は『ソフィーの不幸』を孫娘たちの教化のために書いており[24]、このことからは、読者の作中人物への感情移入が、子供の教育に何らかの影響をもたらすと考えられていることが推測できる。では、セギュール伯爵夫人は読者である孫娘たちが物語の主人公と同化し、架空の冒険を経験することを通して、物語からどのような恩恵を受けることを期待したのだろうか。おそらく彼女は、虚構の世界で孫娘たちが主人公と同化し、後者の感情を共有することを通して情操を豊かに育むことを狙ったのではないだろうか。その場合、作品は子供の情緒発達の導き手となるが、このことから、同様の手法で書かれている『プチ・ニコラ』もまた、小学校での使用は、セギュール伯爵夫人が狙ったのと同じ目的を目指してなされているのではないかと考えられる。第 5 問で

---

23) 『ソフィーの不幸』（*Les Malheurs de Sophie*）は児童文学の基礎を築いたセギュール伯爵夫人（la comtesse de SÉGUR, 1799-1874）によって書かれた子供向けの図書である。1858 年にアシェット・リーブルから、オラス・カステリ（Horace CASTELLI）の挿絵入りで出版された。映画化も複数回なされている。ジャクリーヌ・オドリ（Jacqueline AUDRY）監督（1946 年）；ジャン-クロード・ブリアリ（Jean-Claude BRIALY）監督（1970 年）；クリストフ・オノレ（Christophe HONORÉ）監督（2016 年）。

24) セギュール伯爵夫人は娘婿のロンドン赴任にともなう孫娘たちとの離別をきっかけに 56 歳の時に執筆活動を始めている。13 年間に 20 冊の著書をなしているが、その動機付けとなったのは「孫たちとの触れあいを持ちつづけたいという願い」と、「子供たちを教育し、信仰へ導こうとする意志」であったとフランス児童文学研究者の末松氷海子は指摘する。末松氷海子『フランス児童文学への招待』、西村書店、1977 年、p.107.

「教育的なところ」に惹かれたと答えた人（男性）はここで述べたような理由でこの回答を書いているのだろうし、広く家庭に浸透していることの理由もここで述べたような考えの影響によると察せられる。さて、最終質問（第 7 問）では『プチ・ニコラ』がフランス人の間で絶大な人気を誇っていることから、これを日本の大学における語学教育の教材として用いることに何らかの利益が見込まれるのではないかと考え、この試みについて意見・感想を求めた（読んだことがある 16 名を対象にした）。既に確認した当作品の特徴である、淡々と単純に書かれた文章、ユーモラスな作風、読者の登場人物への感情移入のしやすさは、大学生がフランス語を学ぶ時に、直接的に関係してくる要素といえるのではないだろうか[25]。特に前者 2 項はアンケート調査の結果にもはっきりと反映していた。

まず、『プチ・ニコラ』を語学学習の教材として用いることについての反応を述べると、全員から肯定的な回答が得られた。8 名が勧められる理由を書き加えていたが、その内 4 名（男女、各 2 名）は語学学習面に重点を置いた回答を出している。そこでは、子供向けに書かれた物語であるために文章が簡潔なこと、使われている単語がシンプルなこと、理解しやすいことなどが理由として挙げられているが、これらの回答からは当作品が、文法を一通り学習し終え、学んだ文法事項を確認したり語彙を増やしたりしながら原書に当たってみたいと考える学生に適した書物としてとらえられていることがわかる。

他には「学生にとって面白いから」勧められるという回答もあった（20 代女性）。第 5 問では物語のユーモラスな面に魅了されたと答えた人が多数いたが、外国語を学ぶうえで、テクストの面白さは学習をストレスなく継続していくための重要な要素といえるのではないだろうか。

一方で、文化や社会のありさまを学習者に伝えるのに適した媒介として作品をとらえている人もいた（男性 1 名、女性 2 名）。しかし、60 年という時の距たりは大きく、当作品を通して社会の現状を伝えることは難しいのではないかといったほぼ正反対の見解も出た（女性 2 名）[26]。こうした批判も考慮するなら、作品をテクストとして導入する側からの何らかの工夫が必要になるだろう。

---

[25] 感情移入に関しては、学習者が逐一文法や単語を確認しながら読み進めるので難しいように思われる。反面、感情移入できるようになってくると読み進めていくことが楽しくなって来るため、学習意欲が高まると考えられる。

[26] 第 5 問の回答にも「フランスは理想化されて描かれている」（女性）という書き込みが見られた。

III 教材編

III-1『プチ・ニコラ』を教材として利用できるか[27]

『プチ・ニコラ』をフランス語習得の教材として捉えた場合、まずはその適否、そして利用できるとすれば注意点を明確にしておく必要がある。

まず 10 歳くらいの子どもによる語りであるため難しい語彙や言い回しがなく、また文語に属する高度な修辞技法もなく、日常的な話し言葉が主となるため会話の習得に適しているのではないかという発表者の思い込みがあった。

しかしすぐに批判が寄せられた。初級学習者に予想される困難としては、1)「〜と」や句読点、あるいは「でもね」などが繰り返され、並置ばかりで文章が冗長となる、2)主語か補語が反復される、3)全体として情報の重複が見られる、というものである[28]。

さらに、書き言葉の形式が尊重されず（« " Bon voyage ", il a dit »は正式な書き言葉では« " Bon voyage ", a-t-il dit »とすべき）[29]、口語・平俗・幼稚な言葉が混在している（rire の代わりに rigoler が用いられている）などの難点が挙げられる。

確かに読むのは容易いが、学生が学ぶ場合には「通常の」フランス語と子どもっぽい文体の区別を意識しなければならない。FLE の授業で実効性のある授業展開を目指すなら、初学者にこの区別は難しいのではないだろうか。こうした批判に対しては、例えば 1)文体の特殊性を説明する、2)書き換えた上で抜粋を提供する、3)子どもの表現から数語のみ残し文章を短くする、4)主語と動詞の倒置を通常通りに戻すなどの措置が考えられよう。

III-2 実践 1 " on "の機能

実際に教室で使用することを想定すれば、学生は当然原文で読む。教員は既訳があろうがなかろうが、それを原文で読む必然性を説明できなくてはならない。『プチ・ニコラ』を用いて、原文講読の利点とテクストの楽しみを同時に提供できないか。これが 2020 年度のアトリエの課題であった。

新装版が刊行されたばかりの第 2 巻「プチ・ニコラの休み時間」（世界文化社）

---

[27] 本稿のこの箇所はマリ-ノエル・ボーヴィウ氏（広島大学）から 2019 年の発表時にいただいた指摘を元に、その後の数回のメールでのやりとりを編集し加筆している。指摘に関する誤解や誤訳があれば、すべて本箇所の担当である野呂の責任である。

[28] 前掲箇所（本論注 9 の引用）を例に指摘がなされた. « Nous sommes partis le matin de très bonne heure, **et 1)** avant de partir, papa est allé sonné chez M. Blédurt, notre voisin, pour le prévenir qu'on **partait 3)**, **et 1)** qu'on allait peut-être pousser jusqu'à la côté. **M. Blédur qui était en pyjama à raies 2), 1)** ça n'a pas paru **lui 2)** faire tellement plaisir, je ne sais pas pourquoi, **mais 1)** il a été gentil quand même**, 1) il nous a souhaité3)** bon voyage. "Bon voyage", **il a dit. 3)** » (« Mes vacances de Pâques »(*op.cit.*)).

[29] 類似の例としては« Mes fleurs !" j'ai crié »(*PN*①, p.68, 71)などが挙げられる。

中の「休み時間には、ファイト」を題材に、原文購読の必然性について考えてみたい。

ここで注目するのは、題名にある不定代名詞" on "の複数の用法である。この語は意味上、大きく「不特定の on」と「特定の on」に分けられる。前者は「不特定の人」や人間一般を指し、後者は「特定の人物」として私、私たち、あなた（たち）、彼（ら）など代名詞の機能を持つ。要するに、主語としてあらかじめ指示対象が限定されておらず、不特定か特定か見定め、特定の場合には人称を確定しなければ翻訳はできない。この点を踏まえながら、話で用いられる" on "の用法を見てゆく。

まず原題は « À la récré, on se bat » である。語り手はニコラであるので、一読 « on » はニコラを含む「ぼくら」を指し、一先ずは「休み時間に、ぼくらはケンカをする」と訳せるかもしれない。しかし物語を読み終えた後でも、果たして同じように解釈できるだろうか。

さてこの話は、ジョフロワとニコラによる原因不明の言い争いから始まる。

> — Bon, a dit Geoffroy pendant que nous nous mettions en rang, <u>à la prochaine récré, on se bat</u>.
>
> — D'accord, je lui ai dit ; […][30]
>
> 「わかった」と、教室に入るために、整列をしているあいだに、ジョフロワが言った。「<u>つぎの休み時間にけりをつけようぜ</u>」
>
> 「もちろんだ」と、ぼくがジョフロワに言った。（邦訳、p.69）[31]

下線部分は題名とほぼ同じ表現であるため、題名の" on "もやはり発話者であるジョフロワとニコラを意味する「ぼくら」でよさそうに思えるだろうが、もう少し読み進めてみよう。

ケンカは一旦中断され、続く授業中にはクラス全員が二人のケンカの話題で盛り上がるのだが、当事者であるニコラとジョフロワは先生や親に叱られるのが怖くなり不安を感じ始めている[32]。

---

[30] « À la récré, on se bat » (*PN* ②, p.41) 会話の冒頭は省略している。

[31] 以下の最新版から引用する。以下、強調は全て引用者による。「休み時間には、ファイト」『プチ・ニコラの休み時間』（世界文化社版、2020、p.69）。最新版第 1 巻の後書きにあるように（小野萬吉「物語をより楽しむために」、p.227）、第 3 巻以降の訳者である小野萬吉氏がそれ以前の 2 巻にも手を入れている。

[32] 二人の闘争心はここですでに失せているようだ。リュフュスは、ジョフロワとニコラはケンカをしてもしなくても、いずれにせよ罰を受けるという。それに対するジョフロワの発言が次の引用である。

— Punis, punis, a dit Geoffroy, on sera punis si on se bat. Pour la dernière fois, Nicolas, tu retires ce que tu as dit ?[33]

「罰、罰ってうるせえな」[34]と、ジョフロワが言った。「けんかをすれば、罰を受けるんだ。これが最後だぞ、ニコラ。さっきのせりふをとり消すつもりはないのか？」　（邦訳、p.74）

このジョフロワの発言での « on » は、自分とニコラを指すとすれば「ぼくらがケンカをすれば、ぼくらは罰を受けるんだ」と訳せるが、不特定の用法でより一般的に「［誰だって］ケンカをすれば、［誰だって］当然罰を受けることになる」とも考えられないだろうか。

さて、すっかり怖気づいた二人とは対照的に周囲はどんどん加熱してゆく。まず誰がレフェリーになるかで揉める。

— Dépêchons-nous, a dit Joachim, on va pas se bagarrer pour ça, et la récré va bientôt se terminer[35].

「早くしようぜ」と、ジョアキムが言った。「こんなことでもめてる場合じゃない。休み時間がもうすぐ終わっちゃうぞ」　（邦訳、p.75）

ここでの « on » は文中の « nous » を置き換えているため、不特定の" on "である可能性はないが、当事者の二人を含む「ぼくら」全員なのか、それとも当事者を除いた周囲全員なのかは明瞭ではない。

いよいよケンカの場面となる。レフェリーとなることを宣言したリュフュスをウードがなじり、リュフュスはウードに平手打ちをくらわせる。怒ったウードとリュフュスがとっくみあいを始める。

Eudes, je ne l'ai jamais vu comme ça, et il a commencé à se battre avec Rufus […][36].

こんなウードは今まで見たことがなかったな。それで、ウードはリュフュスと勝負をはじめ、(. . .)。　（邦訳、p.78）

---

[33] *PN* ②, p.47.

[34] 原文を見れば「うるせえな」という苛立ちは訳者の解釈であることがわかる。ここでは周囲の盛り上がりに対して、ニコラとジョフロワはすでに先生の罰と、家に帰ってから叱られてデザートの「クレーム・オ・ショコラ」が食べられないことを気にしてすっかり怖気づいている。それならばと苛立ちよりは、罰が気がかりで、ニコラやめない？と言わんばかりに弱気になっているように解釈できるのではないか。しかもジョフロワの悲痛な（？）呼びかけに対して、「冗談じゃない！」と強気で答えるのはニコラではなくアルセストである。二人の気乗りしない様子は、「ジョフロワと僕は他のクラスメートの後について」校庭へ出たという表現にも表れている。

[35] *Ibid*.

[36] *PN* ②, p.48.

下線部には題名と同じ" se battre "という表現がみられる。すると自明に思われていた題名の « on » は俄に揺らぎはじめる。« on » はニコラとジョフロワを指すと思いきや、実際にケンカの口火を切ったのはウードとリュフュスである。

次にメクサンがアルセストを「デブ」呼ばわりしてケンカが始まる。どさくさに紛れてジョアキムがクロテールを蹴飛ばす[37]。ところがニコラとジョフロワは、仲良く高みの見物を決め込んでいる。

> En tout cas, les copains se battaient drôlement et c'était chouette. J'ai commencé à manger le croissant d'Alceste et j'en ai donné un bout à Geoffroy[38].
>
> 気がつくと、クラスメートたちがあちこちで勝負していて、それは見ものだった。ぼくは、アルセストのクロワッサンを食べはじめ、ジョフロワにもひとかけ分けてやった。
>
> （邦訳、p.79）

ここでも題名と同じ" se battre "が置かれている。クラスメート全員が入り乱れてのケンカとなった。そこへ監視役のブイヨンさんが駆けつけてくる。

> il [le Bouillon] a séparé tout le monde en disant que c'était une honte et qu'on allait voir ce qu'on allait voir, et [...][39].
>
> 恥を知りなさい。どういうことになるのかわかっているのかと言いながら、みんなを引きはなしてから（. . . ）。（邦訳、p.79）

2 カ所の « on » がブイヨンさんを含むのか含まないのか定かではないが、ともあれ、ここでの « on » にはケンカに参加しなかったアニャンとジョフロワとニコラが含まれていないのは確かである[40]。

こうしてニコラとジョフロワはケンカも罰も免れたのだが、ジョフロワが「おまえとケンカしたかったのに」と、ついロを滑らしまう。これを聞いたニコラが挑発に乗り、結局二人はまたもやケンカのモードに入る。

---

[37] クロテールが「前日にジョアキムからたっぷりビー玉を巻き上げ」ていたために、どさくさに紛れてジョアキムが攻撃を仕掛けた。
[38] *Ibid*.
[39] *PN*②, p.49.
[40] *Ibid*.「ブイヨンが、休み時間の出来事を先生に話したので、先生はすごく怒って、クラス全員に居残りの罰をあたえた。だけど、アニャンとジョフロワとぼくは罰を受けず、（. . . ）」（邦訳、pp.79-80）.

— Bon, m'a dit Geoffroy, à la prochaine récré, on se bat[41].

「わかった。つぎの休み時間に、けりをつけようぜ」と、ジョフロワ。　（邦訳、p.80）

この部分は冒頭で既に引用した文と一字一句異ならない（邦訳、p.69）。ここでの « on » は間違いなくニコラとジョフロワを指す。この後ケンカとなり、アニャンを除く「クラス全員」が罰を受けることが仄めかされて話は閉じられる。

但し、二人のケンカと罰はあくまで暗示でしかない。この話でアニャンとニコラとジョフロワだけは実際にケンカをしていない。そこで最後にもう一度、題名に戻ろう。« À la récré, on se bat » の « on » は誰を指しているのか。

冒頭で « on » はニコラとジョフロワに限定できるように思われた。しかし結局のところ、（アニャンと）この二人だけがケンカをしていない。それならもしかしたら題名は「不特定の on」として「休み時間には、［子どもなら］誰でもケンカするものだ」という理解も可能であるし、あるいは「特定の on」として「休み時間に、ぼくらみんなでケンカをするんだ（あるいはケンカをしたんだ）」とも考えられる[42]。

しかしまさに、意味を限定できず曖昧であるがために、原文において、特に題名にある « on » は複数の可能性を示唆している。フランス語学習者が一つ一つの" on "を丁寧に追い複数の解釈に思いを馳せれば、実際にテクストを読みながら、原文でしか読み取れない意味の揺らぎを楽しむことができる。これは例文による学習とは異なる文学テクストの効用の一つといえよう[43]。

III-3 実践 2 文体、対立

『プチ・ニコラ』は、**「I 紹介編」**で記したように[44]、もともとベルギーの『ル・ムスチーク』に連載された BD（マンガ）として出発した。しかしながら、かの有名な「アステリクス」シリーズの生みの親であるゴシニが手掛けながら、BD としてはさほど話題にならず、我々のよく知る文章版として世に出るや大成功を収めたのである。この経緯から、両様式を比較すれば、文章版ならではの魅力が

---

41) *Ibid*.

42) 現行の翻訳では"on"の曖昧さが見事に回避されている。主語が省略されケンカの主体が明示されず、題名には名詞が用いられている。「休み時間には、ファイト」（題名）。「つぎの休み時間にけりをつけようぜ」（冒頭及び末尾）。

43) 仮に本文中幾つかの" on "の指示対象が確定できるとしても、題名に関しては予め意味が固定できず、読解により変化する可能性が認められる。解釈の揺らぎを内包し、読解という行為により読者に反応＝作用を促すこと、これこそ優れた文学テクストの効用の一つであると考える。

44) 「IV 資料編」も参照されたい。

より引き立つのではないかと推察される。

そこで、以下では、BD を脚色して執筆されたと思われる物語 « Le vélo »（「自転車は、だれのもの……」[45]）を取り上げ[46]、原文で読む意味や楽しみをフランス語学習者にどのように説明したらよいか、適宜その元になった BD を参照しつつ考察していきたい。

冒頭部の文体（大人と子どもの対立）

まず、文章版 « Le vélo » の冒頭部を見てみよう。

> Papa ne voulait pas m'acheter de vélo. Il disait toujours que les enfants sont très imprudents et qu'ils veulent faire des acrobaties et qu'ils cassent leurs vélos et qu'ils se font mal. Moi, je disais à papa que je serais prudent et puis je pleurais et puis je boudais et puis je disais que j'allais quitter la maison, et, enfin, papa a dit que j'aurais un vélo si j'étais parmi les dix premiers à la composition d'arithmétique[47].
>
> パパは、ぼくに自転車を買ってくれない。子どもは、とても不注意で、すぐ曲乗りをしたがるし、それで自転車をこわして、けがをするからだめだと、いつも言うんだ。だから、ぼくはとても用心深いよと言ったり、それからうそ泣きをしたり、ふくれっ面でぼくは家出をするつもりだと言ったりして、やっとパパは、もしぼくが算数のテストで十番以内に入ったら、買ってあげようと約束したんだよ[48]。（邦訳、p.159）

この冒頭部で注目したいのは、自転車をねだるニコラとパパの攻防が、文体によって巧みに表現されていることである。パパが自転車を買わない理由が、接続詞 « que » によって 4 つ列挙される一方で、「ぼくはパパにこう言った」（« Moi, je disais à papa que [...] »）で始まるニコラの反撃もまた、「泣く」「すねる」という行為を含めて、« et puis » の単調な繰り返しによって、ちょうど 4 つ列挙されている。このシンメトリックな文の構造は、パパの言葉にある « imprudents »とニコラの言葉にある « prudent » の対比によってもよく表されている。日本語に翻訳してしまうと、「不注意」に対して「用心深い」など、フランス語で « im- » という接頭辞があるかないかのシンプルな違いは必ずしも浮かび上がってはこない。

また、子どもの話し言葉を体現する « et puis » の反復についても、複数の既訳を

---

[45] 最新（世界文化社版）の邦題である。

[46] 2017 年、『ル・ムスチーク』に連載された BD 版『プチ・ニコラ』全てを収録するアルバムが刊行された(*PN* ⑨)。その末尾の二作品は、「図版から挿絵入りの物語へ」として紹介されており、« Le vélo » « La plage, c'est chouette » の二編の物語が、それぞれの元になった BD と共に掲載されている。

[47] « Le vélo » (*PN* ①, p.110) 本作品からの引用における強調は、以下全て引用者による。

[48] 本章では特に断りがない限り、2020 年に刊行された世界文化社版から引用する。

参照しても、これを全て同じ調子で訳しているものはなく[49]、特に最後の « et puis » については、ニコラの家出宣言の直前に置かれていることもあり、「あげくの果て」と訳しているものもある[50]。しかし、この « et puis » の列挙は、前の文の « que » の繰り返しと同じ単調なリズムを創り出し、言葉で諭すパパに対して舌足らずのニコラが懸命に、かつ対等に抵抗していることを伝えるという効果がある。

こうしてフランス語原文では、冒頭部の対比的な文体によって、この物語の軸となる、大人と子どもの対立が鮮明に、そして巧みに表現されているのである。

BDの冒頭部との比較

一方、BD では、「外でどんなサプライズが待っているか当ててごらん（DEVINE）」というパパに対して、自動車、象、船などを思い浮かべるニコラの姿から始まっている（図 2）。「当てる（見抜く）」« deviner » という動詞は興味深いことに、文章版では次のように、ニコラの言葉に転化されている――「パパはガレージに行って、なにかもってもどってきたけど、これを読んでいるみんなには分からないよね？（« vous ne le devinerez pas »）それがね、自転車だったんだ！[51]」（邦訳、p.160 を一部修正）突然 « vous » と呼びかける挿入句によって、読者に考えることを促し、ニコラの語りに引き込む効果をもたらしている。二人称の語りは、この物語に限らず、時折現れて、ニコラを読者により近い存在と感じさせる効果がある。

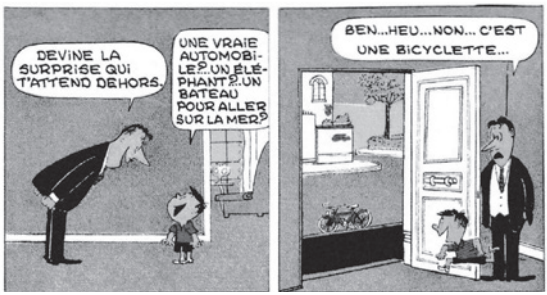

図 2（出典：*PN*⑨, p.34.）

---

[49] 参考までに、本文中に引用した邦訳のほか、二つの既訳の該当箇所を紹介する。下線による強調は引用者による。「パパは、ぼくに自転車を買ってくれようとしなかった。パパはいつも、子どもたちは不注意だし、曲乗りをしたがるし、自転車をこわすし、けがをしてしまうんだといっていた。ぼくはパパに、ぼくは注意深くするよといって、それから泣いたり、ふくれたりして、そのあとで、ぼくはおうちをでていってしまうよといったので、とうとうパパは、算数のテストで十番以内にはいったら自転車を買ってあげようといった」（偕成社版、1996、p.159）。「パパはどうしても自転車を買ってくれようとしなかった。パパはいつも言うのだ。子供たちというのはまったく無謀で、すぐ離れわざをやっては自転車をこわし、けがをするのだと。で、ぼくはパパに用心して乗るからと言い、さんざん泣いて駄々をこね、あげくの果て家を出ていくと言ったので、パパもとうとう、算数の試験で十位以内に入ったら買ってやろうと言った」（牧神社版、1977、p.51）。

[50] 前注を参照。

[51] *PN*①, p.111.

また、文章版では自転車を見たニコラの感激が、「ママにキスをし、パパにもキスをし、さいごに自転車にもキスをした（« j'ai embrassé maman, j'ai embrassé papa et j'ai embrassé le vélo[52].»）」（邦訳、p.160）と、« embrasser » をあえて三回重ねることにより、印象深く表現されている。単に « J'ai embrassé A, B et C » とあるよりも、子どもらしい口調を体現する動詞の反復によって、BD のイラストよりもはるかにニコラの喜びが伝わってくる。ちなみに、最後の « embrasser » は、自転車全体を視野に収めるという意味を含む、一種の言葉遊びと捉えることができる。このような掛け言葉は原文を読むからこそ味わえるものであると言えよう。

パパと隣人ブレデュールの争い

BDから文章版へ、語りの側面のみならず、物語のプロットにおいても、パパと隣人ブレデュールの争いを取り入れることにより、物語が俄然面白くなっている。パパのニコラに対する「坊やのママと出会わなかったら、パパはプロの選手になっていただろう！[53]」（邦訳、p.161を一部修正）という言葉を耳に挟んだのか、ブレデュールは「［自分は］かみさんと出会ってなければ、プロになっていただろうな！[54]」（邦訳、p.162）とパパの発言をほぼ文字通り繰り返す。さらに二人の互角の争いは、次のやりとりにもよく表れている。ここは既訳を用いず、対比が分かるように並べてみよう。

> il [M. Blédurt] a poussé papa qui est tombé avec mon vélo dans les bégonias.
>
> il [papa] a poussé monsieur Blédurt qui est tombé à son tour [...][55]
>
> 「ブレデュールさんはパパを押し、パパは自転車ごとベゴニアの中に倒れこんだ。」
>
> 「パパはブレデュールさんを押し、今度はブレデュールさんが倒れた（…）」

主語と目的補語を入れ替えるだけの文の反復によって、二人の対称的な構図とその滑稽さが際立つ。

結局、二人はどちらが速いかニコラの自転車を借りて（ニコラはまだ乗っていないにもかかわらず）競争するが、最終的にパパがゴミ箱に突っ込み、壊れた自転車を抱えて戻って来る。その情けない様子は原本 p.115（邦訳、p.168）にあるサン

---

52) *Ibid*.

53) *Ibid*.

54) *PN* ①, p.113. なお、隣人のブレデュールは BD の冒頭に収録された作品から登場しており、そこでもオウム返しのような二人のやりとりが台詞によって描かれている。« À TON ÂGE, TU N'AS PAS HONTE D'EMBÊTER LES VOISINS EN JOUANT DU TAMBOUR ?!!!? » « ET TOI, À TON ÂGE, TU N'AS PAS HONTE D'EMBÊTER LES GENS POUR DES BÊTISES !? » (*PN* ⑨, p.7)

55) *PN* ①, p.114.

ペによるイラストにユーモラスに表現されている。ところで、注目したいのは、物語の結末である。

> Le lendemain, j'en ai parlé pendant la récré à Clotaire. Il m'a dit qu'il lui était arrivé à peu près la même chose avec son premier vélo.
>
> « Qu'est-ce que tu veux, il m'a dit, Clotaire, les papas, c'est toujours pareil, ils font les guignols, et, si on ne fait pas attention, ils cassent les vélos et ils se font mal. »[56]
>
> あくる日、学校の休み時間に、ぼくがクロテールにこの話をすると、クロテールも一台目のときには、おなじような目にあったと、教えてくれた。
>
> 「まったく、どうにもならないね」と、クロテールがぼくに言ったんだ。「パパたちはどこも似たようなもんだな。ふざけすぎるんだよ。だから、ぼくらが気をつけてやらないと、自転車はこわされるし、パパたちはあちこちけがをするんだ」　（邦訳、p.169）

最後の下線部は、まさに先述の冒頭のパパの言葉の再現である[57]。冒頭から結末へ、« ils » の指す内容が「子どもたち」から「パパたち」に入れ替わることにより、子どもと大人の立場が完全に逆転していることが同じ表現ゆえに痛快に表現されている。しかも、落ちこぼれでいつも親や教師に叱られているクロテールの台詞だけに、皮肉も強烈だ[58]。『プチ・ニコラ』では、最後にニコラ（この場合はクロテール）の子どもらしい素朴な視点や感想が述べられ、それが物語の醍醐味となっているが、これは « Le vélo » の場合、BDと比較するといっそう際立つ。というのは、BDでは、子ども用の自転車を運転するパパの姿を見て街行く女性が「哀れな人（PAUVRE GARÇON）！」「老いぼれるとは何たる不幸！」と、大人の目線で感想を述べる場面で終わっているからである（図3）。

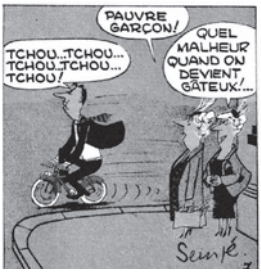

図3（出典：*PN*⑨, p.34.）

補足すれば、文章版 « Le vélo » の二つあとに収録された「算数の授業をサボると……」の中で、ニコラとその親友アルセストが、「へえ、そうかい？（Ah Oui ?）[59]」

---

[56] *PN*①, p.117.
[57] 前掲 (*PN*①, p.110).
[58] クロテールの台詞にある « faire les guignols » は、訳せば「ふざける」「おどける」となるが、小さな自転車がつぶれそうなほど大きな体で全速力で走る二人の＜茶番劇＞は、文字通りのギニョール劇を彷彿とさせる。また、この表現はニコラが自分たちの行動を評してよく用いる表現であり、親と子の＜転覆＞がこの表現にも見られる。
[59] « On a bien rigolé » (*PN*①, p.131)

（邦訳、p.188）、「ああ、そうだとも（Oui.）[60]」（同）という掛け合いのもとケンカをするのだが、そのときニコラは自分たちの姿をパパとブレデュールに重ね合わせている[61]。確かに、文章版 « Le vélo » の中で、「あんたは底抜けのあほだな[62]」（邦訳、p.164）というパパに対して、「ああ、そうですかな？（Ah Oui ?）[63]」「ああ、まちがいない（Oui !）[64]」（同）というやりとりを機に、二人の押し合いが始まっている。すなわち、« Ah Oui ? » « Oui. » というごく簡単なやりとりを介して、パパ vs. ブレデュール、ニコラ vs. アルセストという、大人と子どもの二組の間に相似関係が見出せる。ふとした拍子に大人と子どもの姿が重なり合う面白さは、新品の自転車を見てはしゃぎ、しまいには壊してしまう大人を描く文章版 « Le vélo » に存分に描かれている。

訳者の小野萬吉は、「『プチ・ニコラ』では、駄洒落や地口をのぞいて、ユーモアのほとんどは、類型化された作中人物の対比から生み出されてい［る］」とし、「その第一は、＜子ども対子ども＞のパターン」「第二は、＜子ども対おとな＞のパターン」「第三は、＜おとな対おとな＞のパターン」と述べている[65]。本稿では、これらの対比が、文体、語彙、同じ言葉の反復等によって表されていることを示した。これら文体に由来する笑いは原文で読むからこそ味わえる醍醐味である。また、作者ゴシニが、二人称による読者への呼びかけや子どもの視点への回収など、BDにはない要素を取り入れることによって、物語の面白さを高めていることも指摘した。ただ、日本の4コマ漫画のように、毎回読み切り型で最後にオチがある『プチ・ニコラ』のBDの手法は、文章版にも受け継がれているし、『プチ・ニコラ』に頻出するオノマトペを含む文体は、BDの延長にあると言えるだろう。さらに、BDの段階からゴシニがタッグを組んでいるサンペのイラストも、文章とユニークな相乗効果をもたらしていることも強調しておきたい。

---

60) *Ibid*.

61) 「『へえ、そうかい？』と、パパがブレデュールさんにやるように、ぼくはアルセストをなじった。(…)『ああ、そうだとも』と、アルセストが、パパに言い返すブレデュールさんのようにやり返してきたので、いつものパパとブレデュールさんのように、ぼくらもけんかになった。」（邦訳、p.188）

62) « Le vélo » (*PN* ①, p.114)

63) *Ibid*.

64) *Ibid*.

65) 小野萬吉「物語をより楽しむために⑤」（世界文化社版❺、2020 年、pp.215-217）

IV 資料編

文章版（刊行年順）

Sempé-Goscinny

① *Le petit Nicolas*, 1960.

② *Les récrés du petit Nicolas*, 1961.

③ *Les vacances du petit Nicolas*, 1962.

④ *Le petit Nicolas et les copains*, 1963.

⑤ *Le petit Nicolas a des ennuis* (*Joachim a des ennuis*), 1964.

①～⑤はゴシニの生前に刊行されている。

⑥ *Histoires inédites du Petit Nicolas*, volume 1, IMAV éditions, 2004.

⑦ *Histoires inédites du Petit Nicolas*, volume 2, IMAV éditions, 2006.

⑧ *Le Petit Nicolas Le ballon et autres histoires inédites*, IMAV éditions, 2009.

⑥～⑧は 2000 年代以降に発掘された未刊行作品集である。

現在『プチ・ニコラ』の版権を管理してる IMAV éditions という出版社では、以上の①～⑧に収録されている話のすべてと、幾つかの未刊行作品を 14 分冊にして出版している。この 14 分冊には＜文庫版＞(folio junior)と＜正方形版＞(format carré)の 2 種があり内容はほぼ変わらないが＜文庫版＞には「おまけ」(bonus)が収録されていない。

Le Petit Nicolas

Les récrés du Petit Nicolas

*Les vacances du Petit Nicolas**

Le Petit Nicolas et les copains

*Le Petit Nicolas a des ennuis***

La rentrée du Petit Nicolas （⑥の第 1、2 章を収録）

Les bêtises du Petit Nicolas （⑥の第 3、4 章を収録）

Le Petit Nicolas et ses voisins （⑥の第 5、6 章を収録）

*Le Petit Nicolas voyage**** （⑥の第 7、8 章を収録）

Les surprises du Petit Nicolas （⑥の第 9、10 章を収録）

Le Petit Nicolas c'est Noël ! （⑦の第 1 章と第 2 章の前半を収録）

Le Petit Nicolas s'amuse （⑦の第 2 章の後半から第 4 章前半までを収録）

Les bagarres du Petit Nicolas （⑦の第 4 章の後半と第 5 章を収録）

Le Petit Nicolas le ballon　（⑧を収録）
*＜正方形版＞には「おまけ」として« La veillée d'adieu »（初出 1960 年-1961 年）が収録されている。後に『フィガロ』（*Le Figaro magazine*、2013 年 5 月 17 日号）に掲載されたらしい（筆者未確認）。最新の日本語版では全 5 巻の購入特典として配布された『0 巻』に、小野萬吉氏による翻訳が収録された。
**＜正方形版＞には「おまけ」として« La princesse et le photographe »（初出 1960 年）が収録されている。前掲『0 巻』に翻訳が収録されている。
***＜正方形版＞には「おまけ」として « Roma ou l'aventure automobile »（初出 1962 年）が収録されている。『ツーリング・ジュネス』(*Touring Jeunesse*)という雑誌に掲載された話であるという（筆者未読）。

単行本未収録作品
その他雑誌『ピロット』224 号に掲載され、以上の刊本に収録されなかった « Nicolas vous présente Pilote »（1964 年刊行）という話が以下の本に収録されている。
Pilote, nº.224 in *Les plus belles histoires de Pilote De 1960 à 1969*, Dargaud, 2012, p.20.

マンガ版
マンガ版は 1955 年 9 月 25 日から 1956 年 5 月 20 日にかけて、ベルギーの『ル・ムスチーク(*Le Moustique*)』に発表された。計 28 作品のすべてが以下の書に収録されている。
⑨ Sempé-Goscinny(Agostini), *Le Petit Nicolas La Bande dessinée originale*, IMAV éditions, 2017.

日本語版（二系統（a と b）の日本語訳が存在する）
日本語版(a)
— サンペ絵ゴシニ文　曾根元吉・一羽昌子訳『わんぱくニコラ』文藝春秋、1969 年、＜ポケット文春＞。上記①と②を収録。
— 同『わんぱくニコラ』文藝春秋、I「がんばれ！いたずらっ子の巻」と II「よくまなび・よくあそべの巻」、1976 年、＜文春文庫＞。I は①、II は②の翻訳。

その後③から⑤も翻訳され、以下の叢書（全 5 冊）に収録された。
— 曾根元吉・一羽昌子訳（小野萬吉）『プチ・ニコラ 1　集まれ、わんぱく』偕成社、1996 年、＜偕成社文庫＞。上記①を収録。
— 曾根元吉・一羽昌子訳（小野萬吉）『プチ・ニコラ 2　ニコラの休み時間』偕

成社、1996 年、＜偕成社文庫＞。上記②を収録。
―　小野萬吉訳『プチ・ニコラ 3　ニコラの夏休み』偕成社、1996 年、＜偕成社文庫＞。上記③を収録。
―　小野萬吉訳『プチ・ニコラ 4　ニコラと仲間たち』偕成社、1996 年、＜偕成社文庫＞。上記④を収録。
―　小野萬吉訳『プチ・ニコラ 5　ジョアシャンのなやみ』偕成社、1996 年、＜偕成社文庫＞。上記⑤を収録。

その後③以降の訳者が⑥の翻訳を 5 分冊の形で出している。
―　小野萬吉訳『かえってきたプチ・ニコラ 1　プチ・ニコラ　もうすぐ新学期』、偕成社、2006 年。(⑥の第 1 章と第 2 章)
―　小野萬吉訳『かえってきたプチ・ニコラ 2　プチ・ニコラ　サーカスへいく』、偕成社、2006 年。(⑥の第 3 章と第 4 章)
―　小野萬吉訳『かえってきたプチ・ニコラ 3　プチ・ニコラ　まいごになる』、偕成社、2006 年。(⑥の第 5 章と第 6 章)
―　小野萬吉訳『かえってきたプチ・ニコラ 4　プチ・ニコラ　はじめてのおるすばん』、偕成社、2006 年。(⑥の第 7 章と第 8 章)
―　小野萬吉訳『かえってきたプチ・ニコラ 5　プチ・ニコラの初恋』、偕成社、2006 年。(⑥の第 9 章と第 10 章)

2020 年に出版社が変わり、改訳・新装版が刊行された。
―　曾根元吉・一羽昌子訳（小野萬吉）『Bonjour！ プチ・ニコラ』世界文化社、2020 年、＜プチ・ニコラシリーズ❶＞。上記①を収録。
―　曾根元吉・一羽昌子訳（小野萬吉）『プチ・ニコラの休み時間』世界文化社、2020 年、＜プチ・ニコラシリーズ❷＞。上記②を収録。
―　小野萬吉訳『プチ・ニコラの夏休み』世界文化社、2020 年、＜プチ・ニコラシリーズ❸＞。上記③を収録。
―　小野萬吉訳『プチ・ニコラと仲間たち』世界文化社、2020 年、＜プチ・ニコラシリーズ❹＞。上記④を収録。
―　小野萬吉訳『プチ・ニコラのなやみ』世界文化社、2020 年、＜プチ・ニコラシリーズ❺＞。上記⑤を収録。
―　小野萬吉訳『0 巻』世界文化社、2020 年（非売品。全巻購入特典）。訳者による作者紹介他、①～⑥には未収録で、既訳のなかった貴重な話も 2 編収録されている。

日本語版(b)

— 笹本孝訳『プチ・ニコラ』、牧神社出版、1973 年。④と⑤を合わせて全 32 話の内、27 話を収録。

— 笹本孝訳『続　プチ・ニコラ』、牧神社出版、1974 年。②と④を合わせて 33 話の内、24 話を収録。

— 笹本孝訳『新　プチ・ニコラ』、牧神社出版、1976 年。①と②を合わせて全 36 話の内、29 話を収録。

— ささもとたかし（笹本孝）訳『プチ・ニコラ海へ行く』（新装第 1 版）、美神館、1980 年。『続　プチ・ニコラ』から 10 話、『新　プチ・ニコラ』から 6 話を再録。

— ささもとたかし（笹本孝）訳『おしゃれなパリのプチ・ニコラ』（新装第 1 版）、美神館、1980 年。『新　プチ・ニコラ』から 18 話を再録。

フランス語中級教科書

— 窪川英水編『休み時間のニコラ 』駿河台出版社、1982 年。

— 窪川英水編『プチ・ニコラのおかしな世界』三修社、1984 年（現在は POD* 版）。

— 窪川英水編『プチ・ニコラとゆかいな仲間たち 』三修社、1986 年（現在は POD 版）。

— 窪川英水編『プチ・ニコラの楽しい冒険』芸林書房、1988 年。

— 窪川英水編『プチ・ニコラのおかしな秘密』芸林書房、1988 年。

— 窪川英水編『海辺のプチ・ニコラ』芸林書房、1990 年。

— 土居寛之、石井晴一編『プチ・ニコラ』駿河台出版社、1994 年。

— 窪川英水編『わんぱくニコラ』芸林書房、1995 年。

— 窪川英水編『渚のプチ・ニコラ』芸林書房、1995 年。

*POD(Print On Demand)

実写映像版

テレビ番組

— André Michel, *Tous les enfants du monde*, 1964（短編 23 分、日本未公開）．ロラン・チラール監督による『プチ・ニコラ』（劇場版）のフランス版 DVD に収録されている。

映画

— Laurent Tirard（監督）, *Le Petit Nicolas*, 2009（映画『プチ・ニコラ』、2010 年日本公開）.

— Laurent Tirard（監督）, *Les vacances du Petit Nicolas*, 2014（日本未公開）.

— Julien Rappeneau（監督）, *Le Trésor du Petit Nicolas*（2021 年にフランスで公開予定）.

3D アニメ・シリーズ

2002 年〜10 シーズン。1 話 13 分で全 104 話。